北海道の自然（北海道自然保護協会会誌） No.55 2017, 11-19

札幌の公園整備と機能の変遷：中島公園を中心に

秋山 淳子・蔵満 和泉・榎本 洋介・谷中 章浩・
吉川(佐藤) 真名・中根 有理

要旨

札幌市における公園（おもに都市公園）について、中島公園を中心に創設から平成の再整備に至る過程をたどり、その機能の変遷を検討した。明治初期から札幌では「都市空間における自然」の要素を基礎に公園が設置されたが、都市としての成長とともに開拓政策の進展と相まって勧業・市民娯楽提供など、機能の多角化が昭和期に至るまで進んだ。平成の再整備では、現代的課題である国際化・環境政策的観点から見直され、都会における自然的空間を基調とする「みどり」の機能が重視されることとなった。本稿では中島公園の初期設計思想と実際の景観変遷も視野に、公園整備と機能の変遷につき具体的なあゆみを明らかにした。

1 はじめに

札幌市では1999（平成11）年に、いわゆる「緑の基本計画」を策定、その後、公園や森林と生活空間内の緑化スペースを総合的に「みどり」ととらえた基本計画に改定し、継続して環境保全や「みどり」の活用に取り組んできた[注1]。そうした施策の中核に、都市空間内での緑地機能を担う都市公園整備が位置付けられている。本稿では、都市公園、とくに中島公園に注目し、その創設から平成の再整備に至る過程をたどり、その機能の変遷を検討する。ここから、都市札幌の成長とともに公園の機能が産業・市民娯楽的な側面から発展し、現代的課題のなかで洗練され、都会における自然的空間を基調とする「みどり」の機能へと帰着するあゆみを明らかにしたい。

2 札幌で初めての公園誕生

2.1 偕楽園の誕生

札幌で最初の公園偕楽園は、現在の「偕楽園緑地」（北区北7条西7丁目付近）を中心とした一帯に造られた。『北海道志』（開拓使編 1884）によると、1871（明治4）年、開拓判官岩村通俊が「遊観の所」として周辺の原生林を活かし偕楽園を設置した。アイヌ語では、ヌプ・サム・メム（野の・傍の・泉地）と呼ばれ（山田 1986）、湧き水が流れでる自然郷であったともいわれている。

また、『開拓使事業報告』（大蔵省 1885）では、「北六条ノ西辺」の官園3,600坪、「空知通近傍」の穀菜試験場3,600坪、「空知通西辺」の穀菜果樹移植試験所3,600坪などが1871年に開設されたことになっている。地図や様々な記述のなかでこれらは同一の場所を指し、偕楽園であるとともに開拓使の農園であった。その農園は「札幌官園」のちに「育種場」と呼ばれ、農業試験場として適地適作を求めて数百種の植物を栽培し、年々その規模は拡大した。さらに、開拓政策の普及や移民を教育する目的で、この地に勧業施設を造成・整備していった。

2.2 偕楽園の役割

明治14・15年頃（図1）の、主な施設の取組みを概観してみたい。

①仮博物場 北海道の動植物、鉱物などの自然資料や、先住民族であるアイヌ民族資料などを、一般に公開していた。特徴は開拓使の活動成果を示す缶詰や酒類などの産業資料に現れていた（農商務省 1882）。北海道の博物館の起源といえる（関 1991）。

注1 「みどりの基本計画」および計画の進行、具体的取り組み等については札幌市公式ホームページ http://www.city.sapporo.jp/ryokuka/keikaku/23kihonkeikaku/（2016.10.30閲覧）を参照。

②製物場　北海道最初の工業試験場・農産物加工試験場のような施設で、1878年に設置された。開園当初から既に、絹糸製糸などが行なわれており、その内容は多岐にわたる。

③鮭孵化所　1879（明治12）年に、シャクシコトニ川を利用し、孵化室や池を併設し新設した。孵化試験は前年の1878年、仮設の孵化室を使用して開始された。北海道における孵化事業の発祥地といえる（秋庭 1985）。現在はこの場所に川はないが、当時はサケが遡上していた。

④花室（温室）　1878年に、お雇外国人ルイス・ベーマーの要望で設置された。北海道に普及する花卉（かき）、果樹や穀物種子培養を目的とし、地下室を設け、球根、宿根草や野菜を冬期間貯蔵した。さらに野菜や果実の冬期保存に必要な土室（つちむろ）も併設し、冬期貯蔵試験も始まった。

⑤生徒館　開拓使が外国技術を計画的・組織的に導入するために、農業分野の技術者として養成した若者たちの施設と思われる。

⑥競馬場　1878年、現在の北海道大学農学部辺りに、楕円形馬場が常設され、馬産奨励の趣旨から、官業競馬が催された。毎年6月札幌神社祭、8月屯田兵招魂祭日には各二日間、祭典行事として競馬が行われ賑わった[注2]。

⑦屯田兵招魂碑　西南戦争で戦病死した琴似・山鼻の屯田兵を慰霊するため、1879年に建立された。

⑧清華亭　1880（明治13）年に貴賓接待所として建設され、建物と同様に、造園も築山、ローンや花卉も多く植えるといった和洋折衷であった。1881年、明治天皇の北海道行幸では、休憩所として使用された唯一現存する施設で、札幌市指定有形文化財となっている。

以上、偕楽園は単なる散策憩いの場にとどまらず、勧業施設が林立する北海道の産業振興の拠点であったといえる。

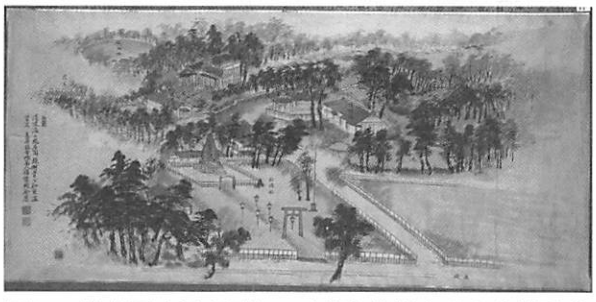

図1　偕楽園之図（明治15年頃）札幌市公文書館所蔵

2.3　偕楽園からの発展

開拓使は1878（明治11）年に、偕楽園が狭小であるために、隣接する地域に育種場を開設した。さらに偕楽園は、当初「唯使員集遊之地」として設けられたが、地券発行の際に地種を「公園相当之地景」として公園とする方針とした（開拓使 1878b）。農業試験場と混然としていた偕楽園を公園として性格付けし、他の施設との機能分離を図るきっかけとなった。そして博物場・製物場・孵化場など勧業施設は、一旦は偕楽園内や隣接地に施設されたが、開拓の進展とともに規模の拡大や役割の多様性が生じたため、また仮博覧会を大通で開催したように、競馬場や屯田兵招魂碑などはイベント広場としては狭いために、農学校の附属植物園・中島公園・千歳などに移設されるなど、それぞれ分離発展していった。

とくに明治20年以降、中島公園・大通などが本格的に整備され、しだいに偕楽園の役割は薄れていった。

3　長岡安平の中島公園設計とその思想

3.1　中島公園前史と長岡安平の招聘

イベント会場としての「中島遊園地」創生　後に中島公園となる場所は、開拓使期には伐木の一時貯留のために木囲池（正方形の池2面）が建設されていた。その後、この場所が中島遊園地となり、1887（明治20）年に物産陳列場や競馬場が建設された。明治期を通じて、中島遊園地は博覧会・共進会等のイベント会場として活用された。

長岡安平の招聘　そのような折、1903（明治36）年の第24回札幌区会で、村田不二三他6名により「公園地造設ニ関スル建議」が提出された（札幌区役所編 1903）。これは円山公園と中島遊園地を都市公園として整備するという内容であり、その趣旨は建議冒頭に「都市ニ公園ヲ要スルハ論ヲ俟タズ」とあるように、札幌が今後都市として発展していく上で公園の設置が欠かせない、というものであった。この建議は委員会の検討の結果「調査費トシテ一千円雑費トシテ三百円ヲ設ケ先ヅ実地調査」を行い、その後に実際の事業に取り掛かりたいという決議がなされた（札幌区役所編 1903）。

しかし、日露戦争の勃発により、計画は一旦凍結された。その間、1905（明治38）年には区内の銀行会社が運動会のため中島遊園地内に運動場を

注2　この年の札幌祭りから、偕楽園内で水茶屋の営業が始まった。札幌祭りの露店は、ここが起点かもしれない（開拓使 1878）。

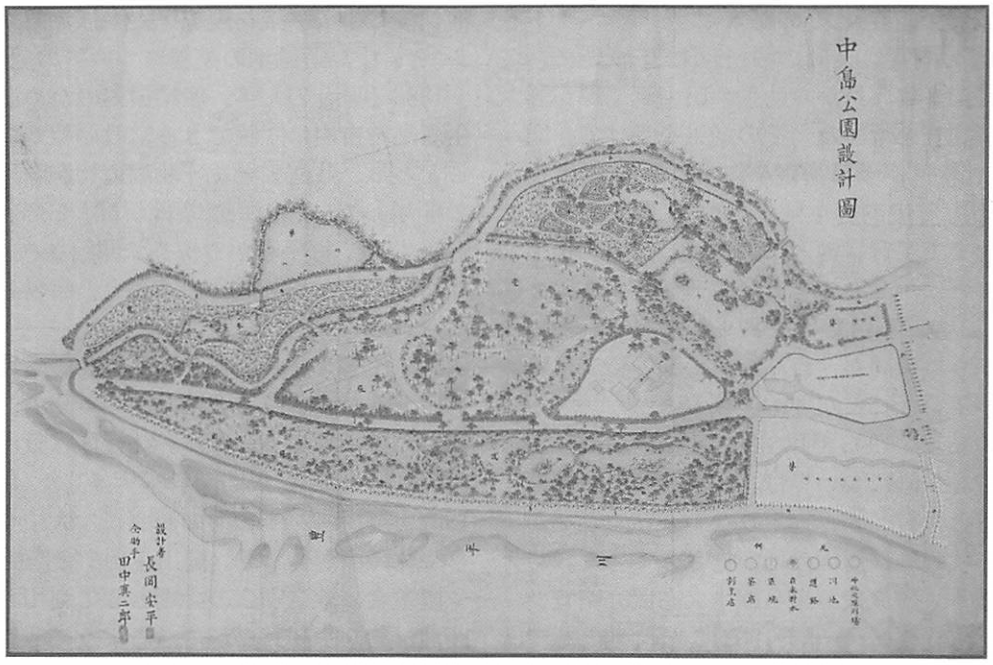

図2　中島公園設計図（長岡・田中 1907）札幌市公文書館所蔵

整備し、使用後は寄付するという願いが区会で議事に挙げられたが、撤回された。（札幌区役所編 1905）。

前述建議が再び日の目を見たのは、1906（明治39）年であった。この時に区会で「時勢ノ進運ニ伴ヒ共同的娯楽機関ヲ設置スルノ必要ヲ認」[注3]めた札幌区は改めて調査費を計上し（札幌区役所編 1906）、同年に300円、翌年には650円の公園調査費が区会で承認された。その際、調査方法については理事者、すなわち札幌区長に一任された[注4]。その結果、当時東京府嘱託技師であり、豊富な公園設計の経験を持つ長岡安平と助手の田中真二郎が招聘され、彼らによって中島公園設計図が描かれたのである（図2）。

3.2　長岡の中島公園設計思想

「自然的」な景観　長岡の中島公園についての設計思想は、「自然的」という言葉に集約される。その含意する所は、風致や美観を伴う、あるいは損ねないために、人の手を加えることを最小限にし、その際にもできるだけ「自然的」な要素から離れないというものであった。しかし、「ありのままの自然」と必ずしも同一ではなく、都市公園として機能させるために、必要な部分に必要なだけ人工を加えることを意味した。具体的には、全体的に平坦な公園予定地の各所に築山を配置し、その一部には樹木を密植することで都市のなかの原生林のような「自然的」景観を演出した。また公園周縁部を流れる鴨々川の護岸改修も植樹によるなど、自然景観に極力配慮したものであった。

西洋近代公園と和風庭園の融合　また、長岡は中島公園から見える藻岩山の遠望を重視した。設計図では全体的に多種多数の樹木の植樹を計画しているが、藻岩山が見える方向についてはその遠望を妨げないように樹木を刈り込むことを助手の田中に指示している（札幌区役所編 1908b）。これは日本庭園における「借景」の概念を取り入れたものと言えるであろう。長岡の設計思想には、こうした周囲の自然の風致をも生かした日本庭園的な「和」の発想と、公園内に運動場や遊具、動物園などを設置するという西洋近代的な都市公園に見られる「洋」の発想の融合が見られる。

注3　ここで謳われている「共同的娯楽機関」が何を指すのかは必ずしも明確ではないが、明治36年建議案の審議時に「中島遊園地ハ札幌ノ公園地ト認メラレ居ルモ未タ以テ公衆ノ娯楽地ト称スベカラザル」ので「今後相当ノ設備」を設け、その収入によって公園経営を為すという考えが区会議員花村三千之助により説明されている（札幌区役所編 1903）。当初から娯楽の場としての公園を構想当初から札幌区が意識していたことが伺える。

注4　当時の理事者（＝札幌区長）は、明治39年6月14日まで加藤寛六郎、同年11月20日から青木定謙、その間は河田猪三郎が助役として区長代理を務めていた（札幌区役所編 1908a）。長岡らを招聘した理事者が誰かは不明であるが、明治40年の8～10月に長岡らが招聘され、図面を作成した事実から、招聘した人物は青木の可能性があると本章筆者は考える。

3.3　公園設計の内容とその結末

公園設計書の内容　長岡の設計図に基づいて、1908（明治41）年5月から助手の田中真二郎が詳細な総工費調査を行った。その結果を受けて、同年10月に札幌区が予算調書を作成した（札幌区役所編 1908b）。その内容を見ると、総工費5万6千円余に対して土工費（池・川の改修、道路工事、丘の造成など）が2万4千円余、植樹費が2万2千円余と、この二項目だけで82%が計上されていた。ここからも長岡が「自然的」公園の造成に特に意を用いていたことが理解できる。

長岡設計の結末　1903（明治36）年の区会建議では、実は中島公園については、規模が狭く景色も優れているとは言えず、物足りないという意見が述べられ、代わりに円山の地が推されていた。そこでは「山水ノ勝ヲ兼ネ泉石樹木ノ布置亦略宜シキヲ得」と（札幌区役所編 1903）、公園地として優れており、都市公園として恥じない場所であると円山が称賛されている。しかし、長岡は中島遊園地に「自然的」公園としての原石を見出し、図1のような詳細な設計図を描いた。

だが、実際には長岡の設計図及び設計書に示された通りの中島公園は実現しなかった。それでも1910（明治43）年には中島公園整備費が議会を通過し、当初計画の一割についてのみ実施された。なお、この時同時に中島遊園地は中島公園と改称されることになった。このように、結果的には長岡の設計通りにはならなかった中島公園が、その後明治末期・大正・昭和を経て平成の現在どのような姿になったのか、次章以降で見ていきたい。

4　中島公園の景観と機能の変遷 ～明治から昭和まで

4.1　明治期　中島遊園地の設置

博覧会の開催地としての中島遊園地　北海道における博覧会の歴史は、1878（明治11）年に大通で開催された農業仮博覧会[注5]に始まる。当初、1885年に根室で開催された以外は、札幌と函館で交互に開催されていたが、1887（明治20）年に中島遊園地内に共進会場と事務所を設営し、開催地をここへ固定化した。『拓地殖民要録』（北海道 1892）の物産共進会項目中に「置庁ノ後場地ヲ一定シ札幌区ノ南部字豊平中嶋ノ榛無ヲ披キ道路ヲ築キ古池ヲ浚ヒ橋梁ヲ架シ観覧ノ人衆以テ逍遥遊息スヘシ」と、中島遊園地の整備についての記述がある。

1888（明治21）年、産業振興のため農工業等の生産品を自由に閲覧できる常設の陳列場を設けることとし、共進会場を「北海道物産陳列場」として開場した（『北海道毎日新聞』1888年7月18日）。以後、毎年春から初冬に開館され、期間中は様々な博覧会や共進会、品評会の会場としても利用された。

遊園・イベント会場としての中島遊園地　北海道物産陳列場の設置と時期を同じくして、遊園地としての整備も進められる。札幌区は貸地規定を定め、園内の一部を民間業者へ貸与した（『北海新聞』1887年7月12日）。池の周囲には大中亭などの料亭や休憩所が作られ、岡田花園[注6]とともに祝賀会や園遊会、歓送別会の会場として利用された。木囲池は釣りや船遊びができるように改修され、休日は余暇を楽しむ人々で賑わった。

偕楽園にあった競馬場が、中島遊園地の設営を機に北海道物産陳列場の裏手に移された。偕楽園同様、屯田兵招魂祭典に合わせ中島遊園地でも札幌競馬が開催された。屯田兵招魂碑は1907（明治40）年に札幌区役所より許可を受け（『北海タイムス』1907年7月5日）、偕楽園から中島遊園地内へ移転、のちに拝殿も建立された。1912年には園内に伊夜日子（いやひこ）神社が建立され、その他、周辺の社寺の祭典、縁日などの宗教行事が盛んに行われるようになった。露店が立ち、大相撲や花火大会などの余興が中島遊園地で行われ、人々が押し寄せた。

中島遊園地内の競馬場は1907年に廃止され、跡地には運動用の広場が整備された。広場では運動会や遊戯会などが行われ、四季を通じて様々なイベントが行われるようになった。

4.2　大正の大規模博覧会がもたらした中島公園の形態と機能の変容

開道五十年記念北海道博覧会の開催　1918（大正7）年に北海道開拓50年目の祝賀事業として、拓殖の進展と現状の提示、北海道のさらなる発展の促進を目的とした大規模な博覧会が挙行された。中島公園はメインの第一会場に充てられ、会場準備とあわせ、樹木の移植や老樹の保護、池の拡張など園内の整備が行われた。第二会場は停車場通（北1条西4丁目）の工業館、第三会場は小樽の水

注5　農業仮博覧会は1883（明治16）年に「北海道物産共進会」と改称した。
注6　岡田花園：札幌の商人であった岡田佐助氏が、1889（明治22）年に公有区を借り受けて中島公園の池の西部に設けた花園。園内では様々な種類の花卉を栽培し、その販売も行っていた。のちに池の整備や茶店の設置を行い、花見や祝賀会などの会場としても人気があった。場所は札幌コンサートホールKitaraから豊平館、日本庭園の辺りである。園内にあった築山は「岡田山」と呼ばれ、ここは現在、札幌市天文台が建っている。

族館とし、8月1日から9月19日までの50日間にわたって開催された。8月15日には開道五十年記念祭が盛大に催された。博覧会全体の入場者数は公式記録でおよそ142万5千人であった。前年末の北海道の人口がおよそ208万人余り、札幌の人口が9万5千人に満たなかったことを考えると、その盛況ぶりが伺える。

博覧会には、池や岡田花園を含む中島公園全体が利用され、園内に合計59棟の施設が建設された。競馬場跡地の広場には博覧会のシンボルである北極塔が建ち、その周囲に馬蹄形にパビリオンが配置された。建物のいくつかは恒久施設として建設され、博覧会後も利用された。池の中央には迎賓館が建ち、博覧会後は洋食レストランのライオン食堂となった。拓殖教育衛生館は博物館類似施設である拓殖館として、農業館は集会場として、式場は展示場として残し、博覧会後は集会活動や美術展などの会場として活用された。

その後も、中島公園を主会場として、1926（大正15）年の国産振興博覧会、1931（昭和6）年の国産振興北海道拓殖博覧会などの大規模な博覧会が開催された。

博覧会後の中島公園～スポーツの場へ　明治期は学生スポーツの発達が著しかったが、スポーツ競技は徐々に一般大衆へ浸透し、青年団体や職場を基とする体育団体が多く生まれた。大正に入り、余興の意味も含んだものから記録を重視した本格的なものまで、様々な競技や大会が行われるようになった。それに伴い、競技施設も整備されていった。

中島公園にも多くのスポーツ施設が設営された。1918（大正7）年の博覧会後に野球場が新設されたほか、プールやスケートリンクの整備も行われた。以下に中島公園の主要なスポーツ施設を紹介する。

水泳プール　明治より中島公園の池は夏にはプール、冬には天然氷のスケート場として利用されていた。全道中等学校競技大会など公式の記録大会も開催されている。1923（大正12）年より園内にあった製氷場を夏場にプールとして開放することとし、1929（昭和4）年に改装が行われ、「中島プール」が誕生した。プールの水は鴨々川から引き入れられたが、当時は底の整備がされておらず、泥と砂利のままだったためすぐに水が濁ったという。

1951（昭和26）年には大規模補修が施され、破損個所の修理と脱衣所や滅菌装置の設置が行われたが（『北海道新聞』以下『道新』と記述。1951年3月24日）、水は依然鴨々川から引かれており、水質など衛生上の問題が指摘されていた。1965（昭和40）年になってようやく水道水に切り替えられた（『道新』1965年6月18日）。1969年にはプール施設が新設され、盛況を極めたが、市内に学校プールやレジャー型プールなどが増加し、利用者が減少したことや、施設の老朽化などの理由から1996（平成8）年に閉鎖された。

図3　開道五十年記念北海道博覧会
第一会場全図　札幌市公文書館所蔵

スケートリンク　1920（大正9）年に札幌スケート協会が設立され、協会は札幌区役所から認可を受けて中島公園の池にスケートリンクを整備した。後に公式のスケート大会やアイスホッケー大会も開催されている。また、中島スケートリンクで同協会主催の仮装イベント「氷上カーニバル」が開始され、冬の市民生活に彩りをあたえた。1949（昭和24）年に中島公園内にスタンド付きの市営野球場が設置されたが、冬期間中は市営スケートリンクとする計画が立てられ、1951年より利用が開始された（『道新』1951年11月4日）。このスケートリンクは野球場が取り壊される1980（昭和55）年まで営業した。

スケート場に関して実現しなかった計画もある。1937（昭和12）年、第5回冬季オリンピック札幌大会の開催が決定し、中島公園の池の南側に地上散水型のスケート競技場を設置する計画が立てられた。しかし、戦争を理由にオリンピックが返上され、中島スケート競技場計画は幻となった。

中島球場　1918（大正7）年の博覧会の跡地利用として、軟式野球場である中島球場が設置された。当時の球場はバックネットとベンチのみの簡素なものであった。1934（昭和9）年に札幌外苑野球場（札幌円山球場）が開設したことで一時は役目を奪われたが、1949（昭和24）年に札幌市創建八十周年・自治五十周年記念事業として中島野球場が再建された。以来、道内の高校野球や社会人野球など多くの大会が行われた。冬はスケートリンクとして営業されるため、野球場の二塁ベースと外野の中央部には地中に水道栓が取り付けられていた（『広報さっぽろ』第109号1955年9月1日）。老朽化などにより、市民に惜しまれながらも1980（昭和55）年に取り壊された。

4.3　戦時期の荒廃と復興～スポーツ施設の拡充

戦争が激化し、それまで行われていた集会やイベントは中止された。戦時中は敷地内に軍の施設がおかれ、一部の通行が禁止された。また、敷地が自給菜園に利用され（『道新』1944（昭和19）年3月14日）、中島公園は荒廃の一途をたどった。終戦後、公園内の施設は進駐軍による接収を受けた。翌年には解除されたが、施設はそのまま引揚住宅として転用された。戦後の混乱が落ち着きを取り戻すと、公園美化の問題も市民の間に意識されることとなり、市は大通をはじめとする公園や主要街路の美化計画を立て、整備を開始した。1949（昭和24）年の中島球場再建に合わせ、引揚住宅は旧札幌飛行場の東に移された。1954（昭和29）年には、市の失業者対策事業として中島公園の池畔の植樹や緑地帯の造成事業が行われている（『広報さっぽろ』第80号1954年6月1日）。

1954年の第9回国民体育大会に合わせて、公園内に相撲場やテニスコート、道立スポーツセンターなどが新設された（『道新』1954年4月22日）。このスポーツセンターは室内競技や演奏会も可能で、国体の後はバレーやバスケットボール、プロレスやボクシングなど様々なスポーツや社会文化行事の会場として利用された。

4.4　昭和の大規模博覧会がもたらした公園形態と機能の変容

北海道大博覧会の開催　1956（昭和31）年6月27日札幌市議会において「北海道総合開発博覧会開催に関する決議案」を議決した（札幌市議会事務局 1972）。博覧会の目的として①北海道総合開発の促進、②産業の振興、③不況対策、④観光北海道の紹介、⑤市民に対する総合開発の周知や国際的視野の拡張、の5点が挙げられている（北海道大博覧会準備事務局 1955、1956）。この決議に基づいて博覧会事務局を設置し、約3年の準備期間と6億7千万円の経費をもって戦後最大規模の博覧会が開催される運びとなった。

北海道大博覧会は1958（昭和33）年7月5日から8月31日まで58日間開催された。第一会場には同年開設予定であった札幌市中央卸売市場の建設用地である桑園地区が充てられた。中島公園は第二会場、小樽市には第三会場が設営された。桑園会場は北海道の総合開発や産業、観光、物産などをテーマとした会場であった。対して、中島公園には科学館や天文台などの文化施設や遊園施設「こどもの国」などを設置し、家族連れで楽しく遊べるような文化・娯楽をテーマとした会場とした。博覧会に合わせて、豊平館が大通から中島公園に移築され、一階は郷土館、二階は美術館として利用された。

公園入口の事務局建物は恒久施設として建設され、博覧会後は中島児童会館の新天地に宛がわれた。岡田花園の築山であった岡田山には天文台が設置された。こどもの国の遊園施設も博覧会後そのまま営業が続けられ、休日は家族連れで賑わった。豊平館は結婚式場や集会場として利用された。

北海道大博覧会後の中島公園～レクリエーションの場・市民娯楽の場へ　戦後の整備事業や博覧会の開催によって、中島公園は復興を果たした。戦後、札幌の総合的重点政策の一つとして、市民の「健全娯楽やレクリエーションのための施設」を設置し、「日常生活の精神的オアシスとすること」という内容の答申案が出され（札幌市臨時振興専門委員会 1948）、以降はその流れをくむような長期計画が立てられている。

1959（昭和34）年、博覧会跡地に記念事業としてバラ園や噴水、彫刻などを配置した「百花園」やたいこ橋、しょうぶ池の造成（『広報さっぽろ』195号1959年4月1日）や整備が進められた。また、中島公園児童会館の前庭には遊具が設置され、児童公園が作られた。1963年（昭和38）には市民への伝統的日本庭園の提供を目的に日本庭園が設置された。1975（昭和50）年には鴨々川に子供のための水遊び場が設けられ、中島公園がもっともにぎやかで華やかだった時代と言える。

『札幌長期総合計画』（札幌市総務局企画部 1971）では「市民の休息やレクリエーションのための都市施設を十分整備し、都市生活においてとかく見失われがちな、人間性の回復と、健全なレクリエーションの振興をはかる」とし、市内の公園緑地やレクリエーション施設の整備が進められていった。中島公園は戦後のスポーツ施設の拡充に加え、博覧会後はレクリエーションの場や遊園施設が増設され、市民娯楽、レクリエーション活

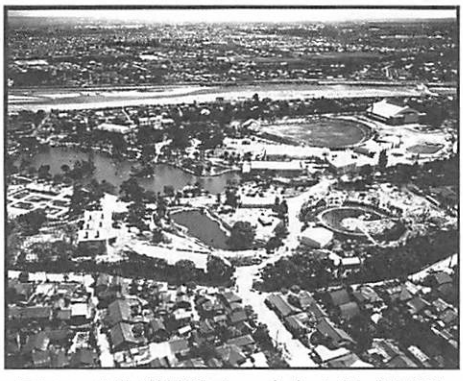

図4　北海道博覧会　中島会場（空撮）
札幌市公文書館所蔵

動の場として親しまれることとなった。

4.5 平成を迎えて

都市の成熟〜中島公園の景観と機能の見直しへ

中島公園は札幌が都市として成長する過程において、必要とされた多様な社会的機能を複合的に展開することで都市の発展を後押しする役割を果たしてきた。しかし、明治40年に長岡安平が設計した理想的な公園像からは遠ざかることとなった。一方で、都市が成熟し、産業振興を促すための博覧会は必要性を失った。平成に入り、中島公園の現況を見つめなおし、長岡の思い描いた自然的な景観や機能美を有する都市公園としての中島公園のあるべき姿を構築すべく再整備が行われる。

5 平成の中島公園再整備

5.1 再整備のテーマ検討

中島公園は、1995（平成7）年から2000（平成12）年にかけ、大規模な再整備を行った。前述のように、多目的な機能を果たしてきたが、この再整備により都市公園としての機能を大きく見直す機会となった。

内部課題　再整備を検討する際、中島公園は内部にいくつもの課題を抱えていた。たとえば、プール、テニスコート、遊具、照明灯、休憩施設などの老朽化や行啓通による公園の分離、そして子供の国や日本庭園により鴨々川の親水性が阻害され、園内の一体感が薄くなっていた。2章で述べたように、中島公園は長岡安平により設計され、その作庭様式を継承しているが、時代の要請する機能を付加し続けた結果、空間を細分する園路や広場などが形成されていた。また藻岩山を借景とした和風庭園的要素については、隣接する高層ビルによって遮られる部分もあった。

都市機能としての公園　再整備のテーマを定める上で検討されたのは、他の主要公園や中心市街地との関連性だった。『中島公園再整備構想報告書』（札幌市 1996）によると、札幌市内の四大公園緑地として、円山公園・大通公園・豊平川緑地・中島公園が挙げられている。円山公園は自然が優先する公園、大通公園は都市（人間）が優先する公園、豊平川緑地は自然とふれあうスポーツレクリエーション緑地、中島公園は自然と都市が融合する公園とされた。さらに、『第3次札幌市長期総合計画』（札幌市 1988）によると、「新しい時代に向けての札幌市は、21世紀の国際社会で重要な役割を演じる国際都市づくりをめざすことが肝要である。従って、都市基盤整備や産業振興など、あらゆる面で地球的な視野に立ち、国際都市にふさわしい質の高い都市環境づくりを進めるとともに、国際交流の舞台となる札幌独自の芸術文化の創造などに勤めていかなければならない。」とあり、「魅力ある都市空間の創出」をするために、「都市空間は、芸術文化機能、高度情報機能、コンベンション機能など、より高次な都市機能を有し、オープンスペースや快適な歩行空間が確保され、市民が誇りをもって次代へ引き継げる、国際都市札幌の顔にふさわしい風格ある都市空間としてつくりあげていく必要がある。」としている。

中島公園は鴨々川の水と緑に代表される市街地のオアシスとして利用されており、芸術・文化の発信、産業・スポーツの振興など、札幌の発展に古くから関わっているため、『第3次札幌市長期総合計画』における芸術文化機能を創造する場として位置づけられることとなった。また、コンサートホールKitaraや国指定の重要文化財である八窓庵、豊平館があることも芸術・文化発信の場とする要因になると考えられた。

蘇る長岡の設計思想　四大公園緑地の中なかでの位置づけ、中心市街地との関連、水景、緑の拠点、発信性などを融合し、中島公園再整備のコンセプトは「都心部の発展に呼応しながら、歴史・文化・芸術が水と緑の景の中に重層化する公園づくり」（札幌市 1996）と定められた。統一感のある意匠・デザインの選定をした上で公園全体の再整備をすることとなったが、そこで採用されたのが長岡安平の中島公園設計思想だった。特に注目されたのは、「中島公園の歴史性・文化の発信性に着目しつつ長岡安平の作庭の様式を継承し、これを基調とする風景式庭園を作り出すべき」点であり、「このテーマに基づけば作庭の契機となった鴨々川の水景と藻岩山の眺望を活用することが重要な課題となる。」（札幌市 1996）としている点であった。明治期に一割のみ実現した長岡の計画は100年を過ぎ平成になって実施されようとしていた。

5.2 再整備後の姿〜2016年現在

都市空間のなかに自然的景観を作り出すという長岡の発想は、時代を越えて現代の再整備のテーマと合致することとなった。新たな構想の景観構成計画を具体的に検証したい。

通景軸　景観構成計画のなかには、動線、通景[注7]、地形、植栽、冬季の利用などが含まれていた。長

注7　通景：見通し。眺望。記念碑や噴水を置き、これに向かう歩行者に対し景観として演出を行う設計手法。

岡の設計構想である風景式庭園を基調とし、移動によって景観の移り変わりを楽しむ構想として通景軸をとり上げたい。図5の下の矢印は、公園北口（右側）から林を抜けると、ボートデッキからの菖蒲池の奥行ある水面と音楽ホールKitaraと藻岩山を望む通景軸を表している。上の矢印は芝生広場から藻岩山を望む通景軸を表している。ボートデッキに立つと、菖蒲池の水と四方を緑で囲まれた向こうに音楽ホールKitaraと藻岩山が見え、通景軸を感じさせる（写真1）。

計画的に造成された植栽　1959（昭和34）年に造成され、長年親しまれた百花園は、これまでの西洋的花壇ではなく、薔薇を鑑賞する場を継承しつつ、疎林に馴染む芝生に遠近感を強調させる丘の広場となった。丘の広場では読書をする市民や犬と戯れる市民の姿がある（写真2）。これは地形のうねりと樹木で空間が分断されないよう風景式庭園に馴染むよう改作することが目的だった。これは当初の長岡構想の日本庭園的な「和」の思想を象徴したものである。

建て替えをした体育センターは、高さの異なる草木で覆われ、その横を通過する人に建物の存在を意識させず、空間の断絶が起きないよう工夫がされている（写真3）。園内を注意してみると、体育センター周辺のみならず公園管理センター周辺や日本庭園など、ゾーンごとに植栽によって空間が覆われている。ゾーン内にいる人、その外を歩く人が互いの視線を気にすることなく過ごすことができ、まさに都会のなかで自然的空間を感じることができる公園となっている。

写真1　中島公園ボートデッキからの眺望

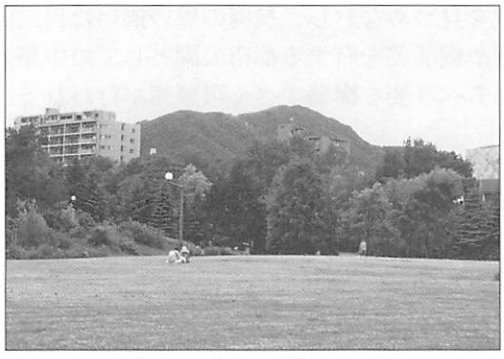

写真2　中島公園丘の広場

写真3　建て替えをした体育センター

6 おわりに

札幌市における公園の機能は、都市の成長とともに時代の趨勢のなかで変化しながら、多面的な展開を遂げた。公園の端緒となった偕楽園は、当初自然郷を生かした「遊観の所」であったが、しだいに産業、教育・文化の振興の拠点として機能するようになった。北海道開拓政策の進展を背景に各機能が拡大し、札幌の各公園空間へと分散・発展していくことになる。

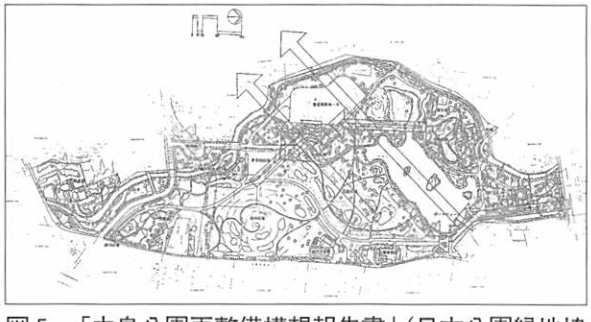

図5　「中島公園再整備構想報告書」（日本公園緑地協会 1993）通景軸図より

中島公園もそうした要請の一環として、当初の貯木場を中心とした産業地区から、市民の憩い場である「遊園地」、そして公園へと成長していった。公園設置に際して作成されたのが、本稿で検討した長岡安平の設計である。長岡は公園予定地域の持つ都市に隣接した自然美に着目し、それを活用した近代的公園を構想し、一部は着手された。しかし、明治末～大正期の札幌市では、長岡の描いた自然との調和よりも、各種博覧会・共進会に代表される勧業・文化振興的政策が重視された結果、現実の公園内の景観は、4章で検討したように、多様な機能を複合的に包含するものとなっていった。こうした傾向は戦時期をはさんで昭和期まで

継続し、札幌市民にとって中島公園はスポーツや文化、遊園地などの一大娯楽集積地としての機能を果たす結果となった。

こうした景観・機能の見直しが行われたのが、平成の再整備である。再整備におけるテーマは、5章で検討したように、国際化時代の市街地のオアシスとして、歴史・文化・芸術と自然との調和が図られた。そこで浮上したのが、長岡の「自然的景観」を軸とした設計思想である。これを基礎に現在の中島公園が都会のなかの自然的空間として整備され、札幌市が推進する「みどり」の保全・推進の重要地点と位置づけられるに至った。

札幌の公園は、明治期から「都市空間における自然」の要素・機能を前提としながらも、都市発展のなかで勧業・市民娯楽提供などの多目的化を余儀なくされた。平成の再整備では、現代的観点からそうした課題を克服し、長岡が示した「都市と自然との調和」という原点回帰に成功したのである。現在の札幌市は、こうした観点に防災などの要素を加味して公園をとらえなおし、「みどり」の推進・保全に取り組んでいる。その意味で、長岡は都市における自然的空間の重要性を理解し、公園設計を通じ百年後の課題を見越していたともいえるだろう。

引用文献

秋庭鉄之（1985）鮭鱒孵化の創始.札幌の歴史8号,新札幌市史編集室編.15-26.

北海道（1892）拓地殖民要録.北海道.

北海道大博覧会準備事務局(1955,1956)昭和30,31年博覧会関係綴.札公文蔵（2013-0023）.

開拓使（1878a）諸課文移録.道文蔵（A4-91-258）.

開拓使(1878b)旧開拓使会計書類.道文蔵(6414-82).

開拓使編（1884）北海道志.大蔵省.（復刻版　北海道志（上）.1973,歴史図書社,329 p.）

長岡安平・田中真二郎（1907）中島公園設計図.札公文蔵（2013-0004）.

日本公園緑地協会(1993)中島公園再整備構想報告書.

日本公園緑地協会（1996）平成4年度作成中島公園再整備基本構想報告書.

農商務省（1882）札幌博物場　札幌牧羊場　札幌育種場引継書類.道文蔵（7263）.

大蔵省(1885)開拓使事業報告　第2編.165 p.,200 p.

大蔵省（1885）開拓使事業報告　第3編.80 p.

札幌区役所編（1903）明治36年区会決議録22回,23回,24回.札幌区役所,札公文蔵（2013-1831）.

札幌区役所編（1905）明治38年区会決議録.札幌区役所.札公文蔵（2013-1834）.

札幌区役所編（1906）明治39年区会決議録.札幌区役所.札公文蔵（2013-1835）.

札幌区役所編（1908a）明治41年区会書類.札幌区役所.札公文蔵（2013-2080）.

札幌区役所編(1908b)中島公園設営予算調書　札幌区役所.札公文蔵（2013-0003）.

札幌区役所編（1911）札幌区史.札幌区役所.（復刻版1973,名著出版,895-897）

札幌市（1960）主要事業十年計画　昭和35年3月.札幌市.

札幌市（1962）主要事業十年計画　追加事業分　昭和37年3月.札幌市.

札幌市（1962）旧豊平町域主要10年計画　昭和37年2月.札幌市.

札幌市（1988）第3次札幌市長期総合計画.札幌市.

札幌市(1996)中島公園再整備基本構想報告書.平成4年度作成.

札幌市議会（1972）札幌市議会小史　第9期（昭和30年5月～昭和34年5月）.札幌市議会.

札幌市企画調整局企画部（1980）新札幌市長期総合計画　第2次5年計画　昭和55～59年度.札幌市.

札幌市計画課（1960）札幌都市計画.札幌市.

札幌市建設部計画課(1954)都市計画概要　昭和29年8月.札幌市.

札幌市総務局企画部(1971)札幌市長期総合計画.札幌市.

札幌市臨時振興専門委員会（1948）札幌市臨時振興専門委員答申.

関秀志(1991)明治期における北海道の博物館(2).北海道開拓記念館調査報告,第30号,92 p.

山田秀三(1986)札幌のアイヌ語地名を尋ねて.北海道新聞社,148 p.

秋山 淳子（あきやま じゅんこ）
札幌市公文書館公文書館専門員。1章、6章執筆。

蔵満 和泉（くらみつ いずみ）
札幌市公文書館公文書館専門員。2章共同執筆。

榎本 洋介（えのもと ようすけ）
札幌市公文書館職員。2章共同執筆。

谷中 章浩（やなか あきひろ）
札幌市公文書館公文書館専門員。3章執筆。

吉川(佐藤) 真名（よしかわ・さとう まな）
札幌市公文書館公文書館専門員。4章執筆。

中根 有理（なかね ゆり）
札幌市公文書館公文書館専門員。5章執筆。